

『盛期ルネサンスの古代建築の解釈』

(中央公論美術出版、2007年1月)

正会員 飛ヶ谷 潤一郎 君

本書は、2003年度に提出された著者の博士学位論文に加筆修正を施して刊行されたものであり、7章からなる本文および2編の付録は本会計画系論文集等に投稿された論文、あるいは講演発表資料を原型としている。この事実からわかるように、本書はルネサンス期を中心とした西洋建築史に関する学術論文を集めた本格的な研究書であるが、にもかかわらず、本書は一般読者がルネサンス期の建築を理解するうえでの格好の読み物としても成立している。

本文では、アルベルティの「パラッツォ・ルチェッライの腰壁に見られる網目積みを模した表面仕上げについて」、「ルネサンスにおけるエトルリア神殿の解釈の変遷」、ブラマンテの「《プレヴェダラーの版画》にみるエトルリア神殿の廃墟」、「ルネサンスにおける古代浴場の解釈」、「ルネサンスにおけるギリシアのフォルム」、「ルネサンスにおけるアッティカ式の解釈について」、「ふくらんだフリーズについて」という7つの題材が取り上げられている。一見して個別、無関係のこれら題材を貫いているのは、古代の再発見者・解釈者としてのルネサンス期の建築家と視点を同じくした著者のまなざしである。今日にいたるルネサンス期の建築に関する研究成果を博捜しながら、著者はひたすら彼らの「誤解」を読み解こうとする。ルネサンスの建築家たちにとって、古代を学ぶことはウィトルウィウスやローマの遺跡・廃墟を読み解くことであった。知識の集積が皆無であり、研究が未成熟であれば、そこにはおのずから誤解が生ずる。翻って今日、日本の西洋建築史学は本家の成熟に比べれば未成熟であって、そこに本格的に参入することは困難であると考えられるかもしれない。しかし、現代日本の西洋建築史研究者であっても、同じ未成熟さを共感しつつ、ルネサンスの建築家たちと同じ視点を獲得しようとするとき、そこにみえるものを追体験することができるはずである。その体験を再結晶化した本著作には、確かな説得力がある。

しかし、著者は直観ばかりに頼って論を進めているわけではない。参考とした文献の膨大さと注解、索引の充実は目をみはるばかりである。読者は、著者のこうした緻密な検討に安んじて、ルネサンスがいかにして古代を再発見したか、あるいは誤解も含めて古代を受け取ったのかという場面の数々に、圧倒的な臨場感をもって誘われる。本書が、学術の進歩発展、および建築文化の普及啓発に寄与するところはまことに大きい。

よって、ここに日本建築学会著作賞を贈るものである。